85　誌上発表

『脈賦』について

水溜　亮一
日本鍼灸研究会

明代以降に刊行された無注本や注解本の『王叔和脈訣』には，その冒頭に「脈賦」と題する歌賦形式の一文が見られる（以下，「現行『脈賦』」と称する）．一方，元末までに出た『王叔和脈訣』の諸版本には「脈賦」は見られない．しかし，これを以て「脈賦」を『王叔和脈訣』の一部と見なしたり，逆に明代の新附とするには疑義がある．

例えば南宋の『秘書省続編到四庫闕書目』では「王叔和脈賦一巻」を著録する．この著録について，清の葉徳輝は『宋史』芸文志および『郡斎読書志』の記載を根拠に「脈訣」の誤記とするが，根拠に乏しい．なお会谷佳光の考証（『宋代書籍聚散考』汲古書院，2004）に拠れば，『秘書省続編到四庫闕書目』は，北宋の政和7（1117）年成立の『秘書総目』の一部の後代の単行書とされる．なお『宋史』芸文志には，北宋の熙寧9（1076）年に『通真子補註王叔和脈訣』を著した劉元賓の『通真子続注脈賦』一巻を著録する．

管見によれば，本書の引用は北宋以前には見えず，南宋の『察病指南』をその初見とする．『察病指南』定四季相尅脈に見える『王叔和脈賦』からの引用は，現行『脈賦』の文章と一致する．次いで元の『脈訣刊誤』診婦人有妊歌の注文にある『脈賦』からの引用とおぼしき一節は，現行『脈賦』とほぼ同文であり，「蓋脈賦脈訣，皆窃叔和之名，以行世」との一文が続いている．北宋成立の『脈粋』に附された南宋・嘉定16（1223）年の序には，南宋代に『脈賦』に『叔和脈訣』を合わせて『診脈要捷』と題して刊行したとの記載もある．

以上を総括すると，北宋の後半には，『王叔和脈訣』とは別に撰者未詳の『脈賦』が存在し，南宋代になると，『王叔和脈訣』同様，王叔和に仮託され，元代以降に『王叔和脈訣』に取り入れられた可能性がある．

『脈賦』の伝本には，無注本と注解書がある．無注本は，明刊『医書八種』，明刊『医要集覧』，清刊の類書『古今図書集成』に収録されている．注解書には，『診脈須知』巻之一所収呉仲広解義「脈賦」，明・熊宗立『勿聴子俗解脈訣大全』，明・張世賢『図註脈訣弁真』，明・劉浴徳『脈賦訓解』（『脈学三書』所収）がある．このうち，『医書八種』『医要集覧』『勿聴子俗解脈訣大全』『図註脈訣弁真』では，『脈賦』は『王叔和脈訣』の前に置かれ，『脈訣』の導入部のように扱われている．

以下，国立公文書館内閣文庫所蔵『医書八種』所収本により，内容を概括する．『脈賦』の本文は747字からなり，その内容は，10章に分かたれる（括弧内は文字数）．①疾病の予後判断における脈診の有効性（12），②左右寸関尺の五蔵配当（36），③栄衛の循環の法則性（10），④性別，年齢や体格による固有の脈状（10），⑤四時・五蔵と脈状の関係による予後判定（185），⑥脈状の分類（40），⑦寸関尺各位の脈状と脈證（262），⑧妊娠と脈状の関係（62），⑨死脈（76），⑩予後判断における脈診の重要性（54）．

冒頭①と末尾⑩で重ねて論じられていることから，本書が著された目的は，予後判定における脈診の有効性を強調することにあったと考えられる．⑨において死脈が論じられていることも，これを證する．また本書の眼目は，字数の多さから見て寸関尺診と五蔵理論にあると思われる．その内容は『王叔和脈訣』と細部に渉り一致するわけではないが，『王叔和脈訣』の導入部としての役割を果たし，内容の共通性を支える枠組みとなっている．なお『医書八種』『医要集覧』には『難経』が収録され，『勿聴子俗解脈訣大全』『図註脈訣弁真』の著者は『難経』の注解書も著している．『脈賦』と『難経』は五蔵理論の重視という点において親和性がある．明代脈学において倶に重要視された『難経』と『王叔和脈訣』の紐帯としての役割を『脈賦』が果たしていると考えることもできる．